

祝! 世界の記憶 登録



《朝鮮通信使に関する記録》

17世紀～19世紀の日韓間の
平和構築と文化交流の歴史



「朝鮮国信使檢卷(文化度)」(長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵)

ごあいさつ

朝鮮通信使に関する外交記録、旅程の記録など関連資料がユネスコ「世界の記憶」に登録されました。



ユネスコ「世界の記憶」は、世界的に重要な記録物への認識を高め、保存や活用を促進することを目的として、1992年から始まったものです。以前は、「世界記憶遺産」と呼ばれており、本県では、山本作兵衛さんの「炭坑の記録画・記録文書」が2011年に日本で初めて登録されたことが記憶に新しいところです。

「朝鮮通信使に関する記録」の登録申請は、日韓両国の民間団体によって行われましたが、記録には朝鮮通信使の経由地であった新宮町・相島での福岡藩による接待の様子が書かれた本県所蔵の黒田家文書などが含まれており、福岡県も、日本側民間団体が組織する「ユネスコ記憶遺産日本推進部会」にオブザーバーとして参加し、登録を支援して参りました。

朝鮮通信使は、江戸時代に、朝鮮国から日本国へ派遣された外交使節団であり、当時の両国の友好親善に大きく貢献しました。今回、日韓両国によって共同申請され、登録されたことが、新たな友好親善につながっていくことを期待しています。

福岡県ゆかりの世界的な価値がまた一つ増えたことの喜びを、県民の皆様と分かち合いたいと思います。

福岡県知事 小川 洋

世界の記憶 (Memory of the World) とは

1992年に開始され「世界遺産」「無形文化遺産」にならぶユネスコの三大事業の一つです。世界的に重要な記録物への認識を高め、最もふさわしい技術を用いた保存を促進し、なるべく多くの人々がアクセスできるようにすることを目的としています。審査は2年に1回、1か国からの申請は2件以内とされています。

主なものには「アンネ・フランクの日記」「ベートーベンの手書きの楽譜」などがあり、国内では、最初の登録となった「山本作兵衛炭坑記録画・記録文書」をはじめ、「御堂関白記」「慶長遣欧使節関係資料」「東寺百合文書」「舞鶴への生還」の5件が登録されています。

この度、平成29年10月31日に「朝鮮通信使に関する記録：17世紀～19世紀の日韓間の平和構築と文化交流の歴史」が「上野三碑」と同時に登録されました。



「山本作兵衛炭坑記録画・記録文書」(c)Yamamoto Family 田川市石炭・歴史博物館所蔵

朝鮮通信使とは

通信使とは、信（よしみ）を使わす使節という意味で、江戸時代、朝鮮から日本へ国書を持って派遣された外交使節です。豊臣秀吉の朝鮮出兵で断絶した国交の回復交渉中に派遣された使節を第1回（1607年）とすると、おもに将軍の代替わりを祝うため、第12回（1811年）まで派遣されました。

通信使は、三使（正使・副使・従事官）をはじめ、文章作成を専門とする製述官など第一級の文人・医者・画家、約400～500人で構成されました。一方、日本では、幕府が総力をあげて接待の準備にかかり、宿泊施設や港・道路の整備、護衛船団の編成、人足や馬の調達などが通信使の通過する沿道各藩に命じられました。

特に、福岡藩は、通信使の案内役として一行と同行する対馬藩を除き沿道の諸藩の中で最初に接待を行うため、その責任は非常に重いものでした。



朝鮮通信使に関する記録：17世紀～19世紀の日韓間の平和構築と文化交流の歴史

「世界の記憶」に登録された「朝鮮通信使に関する記録」は、日本側の資料48件209点、韓国側の資料63件124点、合計で111件333点にも及びます。これらの資料は3つに分類されています。

<Ⅰ 外交記録>

朝鮮と日本の国家機関で作成された公式記録や外交文書。両国の統治者が善隣友好の構築とその存続を願う意思が反映されています。



Ⅰ「朝鮮国王李哈国書」(京都大学総合博物館所蔵)

<Ⅱ 旅程の記録>

朝鮮国首都の漢陽（ソウル）から日本の江戸まで往復約4500kmに及ぶ路程での出来事や見聞したことを記した通信使の記録や、日本の沿道諸藩による饗応の記録。通信使が往来した具体的な状況や異文化に対する相互の憧憬を知ることができます。



Ⅱ「朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図」(正使船部分より正使卜船部分まで)
(松濤園 御馳走一番館所蔵)

<Ⅲ 文化交流の記録>

通信使と日本の統治者から民衆にいたるまでの様々な階層との交流を通じて作成された筆談唱和集、詩文、書画など。両国の友好関係の構築、日本の学問・文化の発展に通信使が寄与したことを証明するものです。



Ⅲ「本蓮寺朝鮮通信使詩書」(本蓮寺所蔵 岡山県立博物館寄託)

福岡県内の資料では「黒田家文書」「小笠原文庫」の一部、計21冊が「朝鮮通信使に関する記録」（Ⅱ旅程の記録）として登録されました。

黒田家文書

「黒田家文書」は、福岡藩主黒田家に伝来した総計590件1013点に及ぶ江戸中期以降の福岡藩庁の記録です。内容は、公的な藩の仕事の記録である「公儀御勤之部」をはじめ、「法令」「日記」「御用帳・御用状」「御家臣之部」「藤井甚太郎氏蒐集資料」に分類されます。昭和39年、旧藩主家の黒田長礼氏ながみちから福岡県に寄贈され、現在は福岡県立図書館で保管されています。

膨大な「黒田家文書」の中には、朝鮮通信使に関する資料が50点含まれています。そのうち、宝暦13年～14年（1763～1764）、徳川家治の將軍就任慶賀のため来日した際の記録である「朝鮮人來聘記」らいへい11冊と「朝鮮人帰国記」4冊が、「朝鮮通信使に関する記録」として「世界の記憶」に登録されました。



ユネスコ「世界の記憶」登録 黒田家文書15冊（福岡県立図書館所蔵）

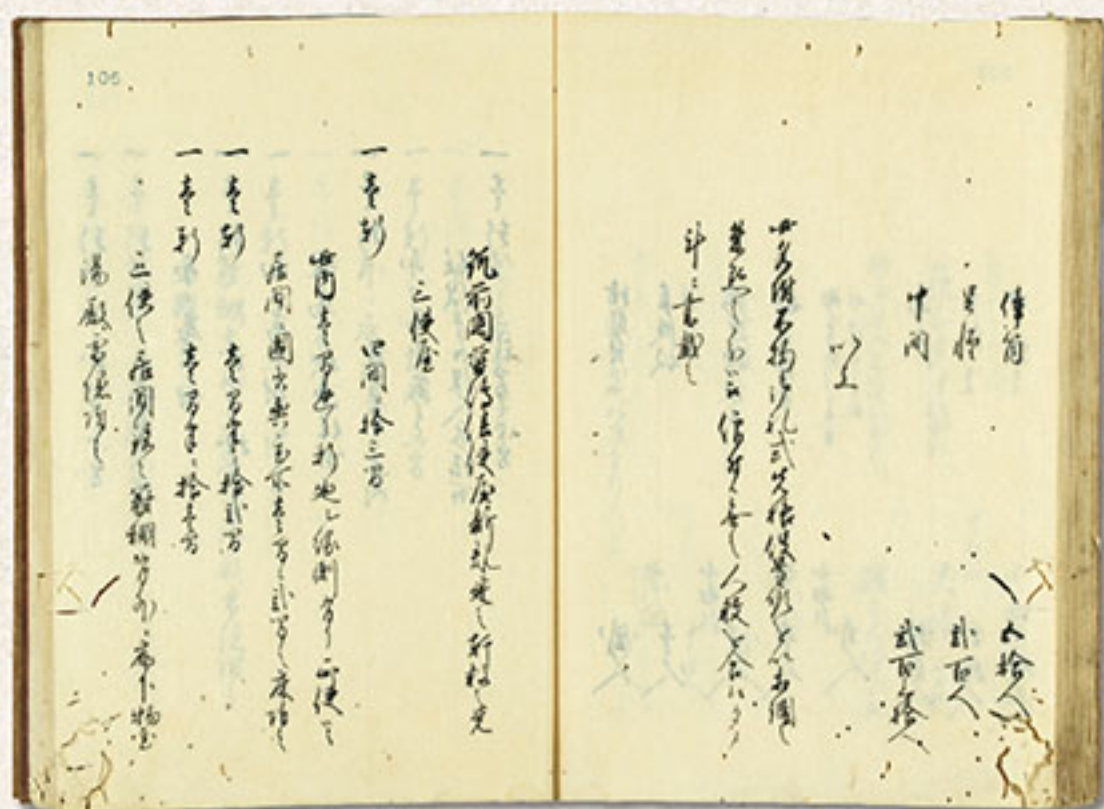
朝鮮人^{5いへい}来聘記 (黒田家文書)

徳川家治の將軍就任を祝うため来日した第11回朝鮮通信使の往路の記録(9巻及び附録、11冊)です。

対馬を出発した一行は、宝暦13年(1763)12月3日に藍嶋(福岡県新宮町相島)に到着し、同月25日まで滞留しました。福岡藩は、家老野村太郎兵衛以下数百人の藩士が島に渡り、藩を挙げて歓待しました。通信使の宿泊施設を新たに24軒建て、要所ごとに提灯を設置するなど細部にまで心配りをしました。

藍嶋への入港時、暗闇で波風が強かったため、福岡藩の迎いの船が先導できず、副使の乗る船が磯辺に乗り上げ座礁する事故が起きました。

これに心を痛めた黒田藩は滞在期間中に贈り物を4度も贈りました。藍嶋では、通信使が島の山に登ったり、詩の唱和をしたりするなど日本側との交流が行われました。



朝鮮人帰国記 (黒田家文書)

宝暦14年(1764)、朝鮮通信使の復路の記録(4冊)です。

4月9日大坂で対馬藩の通詞によって通信使の上官が一人殺害される事件がありました。この知らせは江戸と復路の各所に通知され、福岡には早くも15日に第一報が入りました。これによって通信使の出発は延引され、予定から遅れて5月6日に大坂を出発、5月26日藍嶋に到着しました。

不慮の事態が生じたにもかかわらず、復路においても福岡藩は誠意のある応対をし、両国の関係にひびが入ることはありませんでした。



「朝鮮人帰国記 於大坂横死人之一件」(黒田家文書)

小笠原文庫

小笠原文庫は、小倉藩主小笠原家に伝来した7000点以上に及ぶ古文書・古記録・器物等の資料群です。昭和24年、旧藩主家の小笠原^{ただむね}忠統氏から福岡県立豊津高等学校の同窓会（現福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会）に寄贈され、現在はみやこ町歴史民俗博物館で保管されています。平成17年2月23日、福岡県有形文化財（歴史資料）に指定されました。

最後となった文化8年（1811）の朝鮮通信使に関する記録6冊が、「朝鮮通信使に関する記録」として「世界の記憶」に登録されました。



旧県立豊津中学校（現県立育徳館中学校・高等学校）講堂「思水館」外観（みやこ町教育委員会提供）



小笠原文庫資料展示状況（みやこ町歴史民俗博物館展示室内）

たいしゅうおん げ こう かい りく にっ き たいしゅうおん げ こう こ くら より かいじょう にっ き
対州御下向海陸日記 対州御下向小倉へ海上日記
 たいしゅうおん たいりゅう にっ き たいしゅうおん ざい かんちゅう にっ き
対州御滞留日記 対州御在館中日記
 ちょうせんこくより しんけんの おん しな しゅ ごと かい りく にっ き
従朝鮮国進献御品守護海陸日記 (小笠原文庫)

文化8年(1811)、徳川家^{いえなり}齊の將軍就任を祝うため対馬を訪れた朝鮮通信使を迎えた小倉藩主小笠原^{ただかた}忠固に関する記録です。この時は本土に上陸せず、対馬での応対のみでした。朝鮮通信使はこの12回目の派遣をもって最後となりました。

文化8年2月19日から同年7月25日まで、幕府の上使小笠原忠固が江戸を出発し、小倉から乗船、対馬府中湊に到着、国書交換・音物贈呈などの公式行事を終え、江戸に帰るまでの旅程を記しています。



「対州御下向海陸日記」(小笠原文庫)



「対州御滞留日記」(小笠原文庫)

県内の関連資料 (正徳元年朝鮮通信使参着帰路行列図巻)



紙本着色正徳元年朝鮮通信使参着帰路行列図巻 九州国立博物館所蔵 山崎信一氏撮影

朝鮮通信使を描いた絵画資料は多数残されており、当時の人々の関心の高さがうかがえます。対馬藩の「朝鮮国信使絵巻」(上下巻・文化度、長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵、1枚目のパネルは文化度の一部)は重要文化財に指定されており、今回の登録にも含まれています。

福岡県内にも朝鮮通信使を描いた絵巻がいくつか残されています。福岡市博物館所蔵の「朝鮮通信使行列絵巻」は、正徳元年(1711)に来日した朝鮮通信使の行列を幕府の命令で対馬藩が作成したもので、対馬藩旧臣宅に伝来した原画の控えと思われます。

九州国立博物館所蔵の「朝鮮通信使参着帰路行列図巻」も正徳元年の通信使を描いた絵巻で、正使や国書など行列の様子が詳細に描かれており、通信使の人数の多さと道中の賑わいをうかがうことができます。

朝鮮通信使と相島



相島には対馬藩主や随行者の上陸した「前波止」、通信使のための「先波止」、水を確保するために掘られた「若宮神社井戸」「茶屋の井戸」、享保4年（1719年、第9次）の通信

使を迎える際に水難事故で命を落とした役人や水夫を悼んで建立された石碑といった「朝鮮通信使関連遺跡群」（新宮町指定文化財）が残されています。

相島では通信使を迎えるために竹で毎回新しく客館を新築しました。「藍嶋図」に描かれた客館の位置関係に基づいて平成7年に行われた発掘調査によって、建物跡や井戸跡、漆椀、陶磁器などが見つかっています。

通信使には魚、肉（豚・猪）、鶏、鳥（キジ・五位サギ）、山菜、野菜、果物、菓子など豊富な食材が提供され、食器などは1年も前から準備していました。



「藍嶋図」（岩国徴古館所蔵）
延享5年（1748）の通信使来日の際に、相島での款待の様子を視察に来た岩国藩士が描いた絵図。